

# 令和5年度8020公募研究事業 研究報告書抄録（採択番号 23-4-07）

研究課題：口腔機能低下症の管理実施効果を身体機能と栄養状態から評価する縦断的研究

研究者名：真柄 仁，小貫 和佳奈，井上 誠

所属：新潟大学 医歯学総合研究科 摂食嚥下リハビリテーション学分野

## 【緒言】

申請者らは、口腔機能低下症（以下、低下症）について、病院歯科初診患者への評価の実態、および口腔機能管理を行うことの改善効果について報告してきた。本申請では、口腔機能管理が口腔機能および身体機能に及ぼす効果や、その機能改善に寄与した因子を検討することを目的とするが、1年目は初回評価の横断評価について報告する。

## 【方法】

2023年8月～2024年3月に新潟大学医歯学総合病院の歯科を初診し、本研究の同意を得られた患者35名を対象とした。測定項目は、患者情報として年齢、性別、既往歴、残存歯数を診療録から記録した。口腔機能としては低下症検査7項目（口腔衛生状態不良、口腔乾燥、咬合力低下、舌口唇運動機能低下、舌圧低下、咀嚼機能低下、嚥下機能低下）を測定し、3項目以上に機能低下を認めた場合、低下症と診断した。身体機能として、握力（左右の最大値）、歩行速度（4m歩行速度）、体組成（BMI、体脂肪率、SMI）を測定した。

統計解析は、初回評価の差を低下症該当群と非該当群の2群に分類し、初回評価の差についてカイ二乗検定、またはマンホイットニーのU検定にて評価した。また、母集団全体の各項目の関連性について、スピアマン順位相関係数により有意水準を0.05として実施した。

## 【結果】

35名の初回評価の結果、低下症該当群は17名（48.6%）、低下症非該当群は18名（51.4%）であった。両群の比較について口腔機能評価の該当人数の比較では、咬合力低下（ $P < .001$ ）、舌口唇運動低下 Pa（ $P = .036$ ）、嚥下機能低下（ $P < .001$ ）に有意な差が、検査数値の比較では、咬合力（ $P < .001$ ）、聖隷式質問紙A該当数（ $P < .001$ ）、およびBMI（ $P = .032$ ）に差が認められた。口腔機能評価、身体機能、および体組成との関連についてBMIはTCI値（ $P < .01$ ）、咬合力（ $P < .01$ ）、舌圧（ $P < .01$ ）と有意な相関関係を示した。

## 【考察】

低下症の該当、非該当について、特に咬合力は低下該当人数、数値とも有意な差が認められ、著者らの先行研究の報告と一致し、本研究の母集団においても低下症該当の大きな要因になっていると考えられた。今回の結果は母集団が少ない横断研究であり、得られた関連性については予備調査の段階である、次年度以降には母集団を増加させ、口腔機能管理の効果についても検討する必要がある。